

京都女子大学図書館所蔵『紫明抄』残卷（下）

中 前 正 志
柴 田 清 子

本稿は、中前・柴田「京都女子大学図書館所蔵『紫明抄』残卷（上）」（本誌第十一号所載、二〇一二年三月三十一日発行、以下、「前稿」）に続くものである。前稿では、鎌倉末期頃写と見られる京都女子大学図書館所蔵伝為世筆『紫明抄』残卷（913・364/S031）の前半部・第1行～第202行（全十六紙継がれたうちの第1紙～第7紙の部分）の翻刻を掲げ、その箇所についての京都大学文学部蔵本（京大本）・内閣文庫蔵十冊本（内甲本）・同文庫蔵三冊本（内丙本）との校異を示した。本稿では、それを承けて、同残卷の後半部・第203行～第456行（全十六紙のうちの第8紙～第16紙の部分。第13・14紙間と第14・15紙間に各々断絶あり。前者に若菜下巻の前半中二紙分ほど、後者に若菜下巻後半～横笛卷冒頭部の十紙分ほどが、本来存在していたはず）の翻刻と、その箇所についての前稿同様の校異とを、掲載する。それに先立って、前稿に付した解題部分について、いくつか補訂を加えておきたい。

まず、前稿では、縦界があつて、全体の行数が「四五七行」であると記したが、実際は「四五六行」であつた。それに伴い、前稿に示した各行数を、次の通り訂正する。

前稿 P 72 L 1	全四五七行	↓	全四五六行
L 6	第 397 行	↓	第 396 行
L 11	第 398 行〜第 457 行	↓	第 397 行〜第 456 行
L 14	440・441 行	↓	439・440 行
P 74 L 15	全四五七行	↓	全四五六行
L 16	第 424 行〜第 452 行	↓	第 423 行〜第 451 行
P 76 L 11	第 404 行	↓	第 403 行
P 79 L 17	全四五七行	↓	全四五六行

また、今回翻刻したうち第 296 行の「幼驚駭^(ママ)日本紀」(『源氏物語』若菜上巻「いはけたる」の注釈箇所)と対応する他伝本の本文を、前稿 P 76 L 15・16 に引載したが、一部不正確な引用になっていた。以下の通り、訂正する。

内甲本 「幼驚駭 ^(ママ) 日本紀」	↓	「幼驚駭 ^(ママ) 日本紀」
内丙本 「驚駭 ^(ママ) 日本紀」	↓	「驚駭 ^(ママ) 日本紀」

さらに、前稿 P 71 に記した次の点にも、若干の補訂が必要である。

折り目の跡らしき縦の線が、ほぼ等間隔(十四行分)に縦界と重なるように見られ、その上端部や下端部が三角形

状に破損している場合もある。もとは折本の形であったものが、いつの時点かに卷子本に改装されたのであろうか。

実際、今回翻刻した箇所のうち、第429・443行は

429 □□ ひ給よ

443 □□ あらはし給へるくやうせさせ給

と、その行頭が欠けている。それは、右引前稿波線部に記したように、各行頭部を含んだ上端が三角形状に破損しているからである。そして、これら第429行と第443行とに十四行差あるのは、これも右引部中実線部に記した通り折り目の跡らしい縦の線が十四行分のほぼ等間隔に見られることと、対応している。事実、それら各行の脇に縦界と重なるように折り目の跡らしい線が見られ、それぞれの上端部が破損しているのである。また、全巻最終行の直前、第455行も、

455 □□ 花の中のやとりにへたてなくおもほせとてうちなき給ぬ

と、行頭部が破損している。残存部分外なので確認はできないものの、これも、先の第443行の十四行あとの第457行の脇にやはり折り目の線があり、その上端部を中心に破損が広がっていて、それが及んだものかと思われよう。

このように、折り目の跡らしき縦線が十四行ごとにほぼ等間隔に現れていること、前稿に述べた通りなのだが、今回さらに子細に見てみると、その各十四行分のちょうど中間にも、やはり縦界と重なるように縦の線の見られることが確認できた。結局、十四行分ごとでなくて、七行分ごとに縦線が見られる、ということになる。ただ、線の見え方が異なり、より鮮明な線とそうでもない線が交互に現れていて、それで、前稿では十四行間隔に線が存するものと見誤ったよ

うである。

今回事の通り補訂し得たことは、田坂憲二氏の御検討を承けつつ、「十三世紀の最末期か、十四世紀初頭の書写と推定できる」など⁽²⁾とされる伝伊行筆『紫明抄』竹河卷断簡と京女大本とが「元来一まとまりのものであったことは、最早断言していいものと考えられる」と前稿に述べたことと、連関することにもなる。これも前稿では不充分にしか把握できていなかったことなのだが、同断簡にも、縦界と重なるような形で折り目の跡らしき縦線が七行ごとに、しかも、やはり鮮明な線とそうではない線が交互に、見られる。恐らくそうした状況に基づいてのことなのだろう、同断簡について久曾神氏は「もとは一面七行の折本であつたようである」と記されている⁽³⁾。このことは、右に補訂し確認できた京女大本のあり方とまさに符合するものであるに違いない。同断簡と一まとまりのものであったことについて、「最早断言していいものと考えられる」と前稿に述べたが、さらに、完全に断言し得ることになった、と言つてよからう。とすれば、一面七行の折本仕立てになつていた一連のものについて、竹河卷断簡は伊行筆と伝え、京女大本は為世筆と伝えていことになる。

なお、京都女子大学図書館蔵本すなわち京女大本が、全巻に亘つて京大本と親近性を有すること、前稿にて確認しておいたが、今回翻刻を掲げた箇所についても、京大本との相違は確かに、漢字と仮名の違いや訓点・傍記の違いのほか（後掲校異にはそれら相違も含めて示している）、

- | | | | | | |
|--------------|------------------|-----------------|--------------|---------------------------|----------------------|
| 217 弥益女—弥益女也 | 257 もて王とす—王とす | 261 各—吾 | 269 物—物と | 276 つみける—つきける | 290 けちえんに—け |
| ちえん | 295 もえきかけ—もえきのかけ | 296 幼 驚駭—驚駭 | 327 たつこと—たつを | 351 右大臣—右大将 ^{臣兼} | 388 穆—初 ^同 |
| 393 鐘—鍾 | 403 なかめて—なかめつ、 | 420 ひとりうち—ひとりこち | 427 しるへき—しるき | | |

といった、かなり微細な相違十五箇所ほどに限られている（行番号と共に京女大本の本文を掲げ、棒線を引いた、その下に京大本の対応本文を示した）。

- （1）『源氏物語享受史論考』（風間書房、平21）第四章の「一〇『紫明抄』の古筆資料について」。
- （2）小松茂美氏『古筆学大成』第二十四巻（講談社、平5）。
- （3）『仮名古筆の内容的研究』（ひたく書房、昭55）。

本稿は、前稿と同様、京都女子大学大学院文学研究科国文学専攻博士前期課程の平成二十三年度授業「中世文学演習Ⅰ」同二十四年度授業「中世文学演習Ⅱ」において、担当者の中前と受講生の柴田とが協同で検討した結果に基づく。以下の翻刻本文は柴田が作成して中前が確認、右の解題補訂は中前が作成して柴田が確認、後掲の校異は適宜分担しつつ二人で作成したものである。御高配を賜った所蔵者・京都女子大学図書館の関係各位に、深謝申し上げます。

《京都女子大学図書館所蔵『紫明抄』残巻 翻刻》（第203行～第456行）

翻刻の要領は前稿に示した通り。

又云愛利俱行衆乃悦

そのころの右大将やまひしてし、給 ひけし申給

205 辞し給也

卑下する也

ところ／＼のきやう とんしきなど

所々饗

屯食

このおとゝそいまさかりのしうとくとはみえ給

宿徳

いとなし

*209「いとなし」朱の「

」で括られている 「と」は別字を書いた上から重書き

210 かわうおん

いとなし

賀王恩

最無二

よしめきそしてふるまふ ひそみゐたり

存して也

頻
ヒソム

*212「ひそみ」別字を書いた上から「ひ」と重書き

やよひの十よ日のほとにたいらかにむまれ給ぬ

215 東宮誕生事

御母明石中宮

六条院御女
母明石上

入道前播磨守女也

例

醍醐天皇誕生事 御母皇太后宮胤子

内大臣高藤公女
母交野大額彌登女

まことのおは君 かたほならは ろくのきぬ

祖母也

頑

禄

220

うつくしみ

おほとかなる物

うけはらぬなどを

愛

穏
オホトカナリ

不諾

すみの山を

みはへしにも

*219「禄」「示」偏が「衣」偏に書かれている

須弥山也 見侍し也

ないけうの心をたつぬる中にも夢をしんすへき事おほく侍し

昔訖栗枳王キリキワウといふ人迦葉仏の父也ありき十の夢を見て

迦葉仏に問たてまつり給へり仏の、給はくこれみな当

来尺迦遺法の弟子の先兆を表する也と云々

第一夢云一の大象室内に閉られてさらに門戸なし

但ちひさき窓あり其象方便して身をなけていつる事を

えたれとも尾猶まるとにさえられていつる事あたはす

これは尺迦遺法弟子等父母妻子をすて、出家発

心して仏道におもむくといへとも猶名利をいたく事

（以上、第8紙）

尾のまるとにさえらるゝかことくなるを表す

第二夢云ひとりの渴人ありて水をもとむるに即一の井

あり其水八功德水也井は渴人にしたかへともこれをのます

これは遺法弟子諸道俗等あへて法をうけすして知法

の物あれともしかもかれにしたかひて学せざる事を表す

第三夢云人ありて一叔の真珠をもちて一叔の麦

のこにかふとみる

* 225 振り仮名は朱書き

* 238 「麦」 「表」と書いた上から「麦」と重書き

240

これは遺法の弟子利を求かために仏の正法をもちてへつらひて人のためにとく事を表す

第四夢云人ありて栴檀をもて凡木にかふとみる

これは遺法弟子内の正法をもて外の書典にかふる事を表す

第五夢云妙園林の花果しけくさかなるあり狂

賊これをやふりうしなふとみる

245

これは遺法弟子ひろく如来の正法の園を滅せん事を表す

第六夢云諸小象ありて一の大象をかりて象の中を

いたさしむとみる

250

これは遺法弟子もろくのあしきともから破戒の衆僧

ありて有徳の人を擯出する事を表す

第七夢云一の獼猴ありて身にきたなき物をぬりて

をのれか衆の湯あむる所にいたりて其船におりぬ衆

皆不浄なる事を知て悉にけさりぬとみる

255

これは遺法弟子諸悪事をもて良善にくはへてけか

すにみる物みなどをくさる事を表す

第八夢云一の獼猴まことに徳ある事なけれども衆も

ろともに海水をとりて頂にそゝきてもて王とすと見る

* 252「おりぬ」「て」と書いた上から「ぬ」と重書き

260

これは遺法弟子もろ／＼のあしきともから破戒の僧を
あけて衆の和上とせん事を表す

第九夢云一の衣ありかたくして又ひろし十八人の輩あり
て各少分をとりて四面にあらそひ／＼に衣猶やふれすとみる

これは遺法弟子仏の正法をわかちて十八部となすに

265

すこしき異説はありといへともしかも真の法は猶存せ
りこれによりて修行するに皆解脱をうといふ事を表す
第十夢云おほくの人ありてともにあつまりてたかひにあ
ひ征伐して死にいたるとみる

これは遺法弟子十八部の内に各門人ありて部執不

同にして鬭諍をおこす事を表す

そのかへりまうし

たゝわか身はへんけの物おほしなして

賽

復命

変化

さほのほかのきしにいたりて

たてあつめたるくわんふみ

娑婆

願書

くまおほかみにもせし侍なん

まかりまうし

そふんし給

熊狼施

辞

処分也

* 271「あつめ」別字を書いた上から「つ」と重書き

275 ほとけの御弟子のさかしきひしりたにわしのみねをはたとく

しからすたのみきこえなから猶たき、つみける夜のま

とひはふかゝりけるを

生者必滅尺尊未免梅檀之煙楽尽哀来天人猶逢

五衰之日

280 このふみのことは さすかにかうにしみて

詞 香

なかのみさうしより この宮をらうしたてまつりて

御障子 領したてまつる也

とりのねきこえぬ山にとなん

285 とふとりのこゑもきこえぬおく山のふかき心を人はしらなん 古今

さらはそのゆいこんなゝり いとあやしきほんしとかいふやうなる

遺言 梵字也

いうそくに せんそのおと、 あまりひたゝけて

優息に 先祖大臣 叨 ヒタ、ク
ムサホ、ル

290 けちえんに かくしもくし給へるありさまの

掲焉に 具し給へる也

ふくちのそのにたねまきて

* 285

行尾「今」の下端が切断されている

百千劫^万菩提種八十三年功德林

295 このよにてほたいのたねをまきつれば君かひくへき身とそなりぬる
いはけたる けうして わかきゑふつかさ もえきかけ

幼 驚駭日本記

興

衛府官

萌黄

いとみつ、 みはしのなかのしな

挑

御階中階

みはしの第二のはし
ならんかし

さくらはよきてこそなとの給

300 ふくかせも心しあらはこの春はさくらをよきてちらさゝらなん

春のたむけのぬさふくろにやとおほゆ

拾遺云ものへまかりける人のもとにぬさをむすひふく

ろにいてつかはすとて よしのふ

あさからぬさきりむすへるこゝろは、たむけのかみそしるへかりける

305 つはいもちゐなしかうし

椿餅

梨子 柑子

花の木にめをつけてなかめやる

おきもせずねもせてよるをあかしては春の物とてなかめくらしつ 伊勢語

猶うちとのおほからす

* 307「伊勢語」

下端が切断され、「語」の
一部のみ見えている

310 内外用意

みやまきにねくらさたむるはことりもいかてか花のいろにあくへき

果鳥ハコ 只鳥カホ 容鳥カホ 春鳥也
常陸国にはかきつはたをかほはないふこの花
 さく時この鳥あり

あやなくけふはなかめくらし侍る

みすもあらすみもせぬ人の恋しくはあやなくけふやなかめくらさん

ひきしのひてれいのかく

例の書といふ也

315

光源氏物語卷第二十 わかな下 若葉下

320 ことはりとはおもへとうれたくも侍かな

あしひきの山たのそをつをのれさへわれをほしといふうれはしきこと如 古今

* 321 行尾「今」の下端が切断されている

なぞかくことなる事なきあへしらひはかりをなくさめにて

はいかゝすくさん

ことならはおもはすとやはいひはてぬなそ世中のたまたすきなる 古今

* 324 行尾「今」の下端が切断されている

325 殿上のゝりゆみ

賭弓 賭射とも 射的とも 三月尽にをこなはる

(以上、第11紙)

花のかけいと、たつことやすからて

330

けふのみと春をおもはぬ時たにもたつことやすき花のかけかは
やなきのはをもゝたひいあてつへきとねりもののうけはりていと
むむしんなりやすこしこゝしきてつきともをこそいませめ^と

新古今

とて大将たちよりはしめてくたし給

楚有^ニ養由基^{ヤウユキトイフヒト}者^{セム}善射^{シヤ}者也去^ニ柳葉^{ニシテ}百步^{モハタヒハナサ}而射^{モハタヒハナサ}百^{モハタヒハナサ}発而

百中^{ヒアル}左右^{ニミルモノ}觀者^{イフ}数千人皆曰^ト善射^ト史記周本記

われさへおもひつきぬる心ちす ろんなうかよひ給

335

付思也

論無

けいし給へは あのこと ゑしきこえ給

啓

如案

怨

世中のつねなきによりかしこきみかとの君も位をさり給ぬる

にとしふかき身のかうふりをかけんなにかはおしからんとおほし

340

の給

掛冠

東觀漢記曰王莽居椅子^{マウ}宇諫莽而莽誅之逢萌謂

其友人曰三綱絶矣不去禍將及人解冠掛東門而去

蒙求逢萌掛冠

* 339「んと」 別字を書いた上から「と」と重書き

345 後漢逢萌字子康北海人掛冠避世牆東

懸車

古文孝經曰七十老致仕懸其所仕之車置諸廟永使子

孫監而則正而立身之終其要然也漢薩広徳為御

史大夫凡十月免婦沛太守迎之界上沛以為榮懸其

安車伝子孫

師古曰懸其所賜安車以榮
榮致仕懸車亦古説也

左大将右大臣になり給てそ世中のまつりことつかうまつり給ける

粟田関白 道兼公 右大臣撰録事

350

目
めをさへこのひたゝして 御いきほひ さえくしく はふかせ給

囁 タゝス

徳 イキホヒ 才

省 ハフク

355

へいしう ひとたまひ 人のみありさま

陪従 人給 出車之名也 御ありさま也

* 355「へいしう」別字を書いた上から「しう」と重書き

十月なかの十日なれは神のいかきにはふくすもいろかはりて

ちはやふる神のいかきにはふくすも秋にはあへすもみちしにけり

をとにのみ秋をきかぬかほなり

もみちせぬときはの山にふくかせのをとにや秋をきゝわたるらん

こまもろこしのかくよりもあつまあそひのみゝなれたる もとめこ

360

高麗 唐 楽

求子

かみよをへたる松にことゝふ みかとよりこのものみおさ／＼し給はす

神代也

門外見物也

365

たかむらの朝臣のひらの山さへといひける雪のあしたをおほしやれは

浪起桑田行変海花開用令不依春 封雪琴 野相公

（以上、第13紙）

370

ことをまねひとらんとまとひてたにしうるはかたくなあら
りけるけにはたあきらかにそらの月ほしをうこかし時な
らぬ霜雪をふらせくもいかつちをさはかしたるためし
あかりたるよにはありけり

弾琴有得失事

礼記云楽者天地之和

漢書礼楽志云象天地而制礼楽所以通神明立人倫 師古曰倫理也

礼記云移風易俗天下皆寧 言楽用即正人理和陰陽

漢書礼楽志云孔子曰安上治民莫善於礼移風易俗莫

善於楽

師古曰此孝經載孔子之言也 謹古善字

至人樞思制為雅琴 文選琴賦

能^{ツク}尽^ス二雅琴^ヲ一唯^{ヒトリ}至^{ノミナリ}人^{ノミナリ}兮 同

380

五音得失事

文選嘯賦注云發徵則隆冬灝蒸騁羽則嚴霜夏凋

動商則秋霖春降奏角則谷風鳴條

翰曰熙美也徵夏音也故冬發此声感炎蒸至羽冬音

也夏騁此声感嚴霜至商秋音也春動此声則秋霖降

385

角春音也秋奏此声感温風鳴條也谷風則春風也皆音

律至妙感応有如此者善曰列子曰鄭師文学琴於師襄

師襄曰子之琴何如師文曰請嘗試之於是当春而叩商絃

以召南呂涼風穆至草木成実及秋而叩角絃以敷哭鐘

温風徐廻草木発榮当夏而叩羽絃以召黄鐘霜雪交下

390

川池暴冷及冬而叩徵絃以激蕤賓陽光熾烈堅水立

散師襄曰雖師曠之清角鄒衍之吹律無以加之張湛曰

商金音属秋南呂八月律角木音属春夾鍾二月律羽

水音属冬黄鐘十一月律徵火音属夏蕤賓五月律鄭

玄礼記注曰喜蒸也声類曰喜熙字也

395

おにかみのみゝとゝめかたふきそめにける物なれはにやなまゝ

にまねひて思かなはぬたくひありけるのちこれをひく

はよしなしといひて琴のを、たちて其後ひかさりし
事をよめる也

400
むかしの御わらはあそひのなこりをたに思いて給はす
おもふとはつみしらせてきみ、なくさわらはあそひのてたはふれより

よのうきつまにといふやうに

あさちふ^の。をさ、かはらにをく露そよのうきつまと思ひたる、
かきりたにあるとうちなかめて

405
恋しさのかきりたにあるよなりせはつらきをしゐてなけかさらし
き、わくはかりならさせ給へ

ことのねをき、わく人のあるなへにいまそたちいて、を、もすくへき
しかつたはるなかのをはことにこそは侍らめ

和琴第二絃

410
月さしいて、くもりなきそらにはねうちかはすかりかねもつら
をはなれぬうらやましくき、給らんかし

しら雲にはねうちかはしとふかりのかすさへみゆる秋の夜の月
かせはたさむく物あはれなるに

はたさむく風はよことにふきまざるわか思いもはをとつれもせず

*402「あさちふ^の」「^の」は別筆

さうふれんをひき給

415 想夫恋 平調

ことにいてゝいはぬもいふにまさるとは人にはちたるけしきをぞみる

心にはしたゆく水のわきかへりいはておもふそいふにまされる

たまのをにせん心ちもし侍らぬのこりおほくなん

かたいとをこなたかなたによりかけてあはすはなにをたまのをにせん

いもとあれというさの山のところゑはいとおかしうてひとりうちうたひて

いもとあれというさの山の山あらゝきてなとりふれそやか

ほまさるかにやとくまさるかにや 催馬楽

かゝるよの月に心やすくゆめみる人はある物か

かくはかりおしと思よをいたつらにねてあかすらん人さへそうき

425 ふえたけにふきよるかせのことぬならはすゑのよなかきねにつた

へなん

(以上、第15紙)

おひそめしねよりそしるへきふえたけのすゑのよなくならんものとは

おほやけの御ちかきまもりをわたくしのすいしんにりやうせんとあ

□□ひ給よ

430 匂兵部卿の宮またいとけなくて三宮と申、時御あにの式部

* 429

上端部が欠損している

卿の宮も二宮とてうちつれてあそひ給所を夕霧の大

將のとをり給にわれたかれんとたかひにあらそひ給を源

氏の院御らんしとかめて仰られたる御詞也近衛つかさをはちか

きまもりといふゆへなり

わかめのうちつけなるにやあらん ことなのりいてくる人たになき事

目 子

かのゆめは思あはせてなんきこゆへきよるかたらすとり女かのつたへにいう也

孫真人云夜夢不須説

* 437「り」か 別筆にて「か」と訂正

440

光源氏物語す、むし 鈴虫 横笛並

夏ころ。すちすの花のさかりに入道のひめ宮の御持仏と

□あらはし給へるくやうせさせ給

供養也

* 442「。すちす」は「。」「は」は別筆
* 443 上端部が欠損している

445

御ねんすたうのくとも はたのさま めそめもなつかしう

念誦堂具也

幡 目染

からの百歩のえかう かえうのほう みやうかう みちをかくしほゝろけて

百歩衣香 薰物也

荷葉方

名香

密^ツと、めて合たる也

* 448「荷葉方」

「也」と書いた上から「方」と重書き

けかけたるかね

ちんのけそく

仏の御をなしちやうたいのうへ

450 計金

沈花足

頂戴

たうかさはて、

かうしまうのほり

きやうかうの人くまいりつとひ給

堂 餉

講師

行香

かうせち

講説

455

□□花の中のやとりへたてなくおもほせとてうちなき給ぬ

一々池中花尽満花々惣是往生人各留半座乗花

* 455「おもほせ」

別字を書いた上から「ほ」と重書き

* 455

上端部が欠損している

(以上、第16紙)

《京都女子大学図書館所蔵『紫明抄』残巻 校異》(第203行～第456行)

校異の要領は前稿に示した通り。

203

愛利—愛^レ利(京)

204

その—かの(内丙) し、—しし(内甲) ひけし申給—ナシ

(内丙)

205

卑下する也—ナシ(内丙)

- 206 とこやうナシ（内丙） とんくなどナシ（内丙）
 207 所々饗ナシ（内丙） 屯食ナシ（内丙）
 208 このゝえ給ナシ（内丙） みえー見え（京）
 209 宿徳ナシ（内丙） いとになしナシ（京・内甲・内丙）
 210 かわうおんーかわうをん（内甲・内丙）
 211 賀王恩ー賀王恩也（内丙） 最無二ー最無二也（内丙）
 212 よしゝまふーナシ（内丙） ひそくたりナシ（内丙）
 213 存して也ーナシ（内丙） 類ヒソムー嘸ヒソム（京）ナシ（内丙）
 214 十日ー十日（内丙） ほとー程（内甲） 給ぬー給（内丙）
 215 入道く女也ー入道く女也[※]「母明石上」の左（内甲） 女也ー女也^{孫敬}（内丙）
 217 皇太后宮ー皇太后宮（京・内甲） 胤子<sup>内大臣高藤公女
母女野大臣高藤公女</sup>
 218 （京）胤子ハ内大臣高藤公女母ハ交野大領弥益女也（内丙）
 219 ろくのきぬーナシ（内丙）
 220 祖母也ー祖母君也（内丙） 頑ー頑也（内丙） 祿ーナシ（内丙）
 221 うつくしみーナシ（内丙） 物ーもの（内丙） うけはらぬーは
 222 ぬ（内甲） などをーナシ（内丙）
 223 愛ーナシ（内丙） 穩^{オホトカリ}ー穩^{ワサビ}（内丙） 不諾ーナシ（内丙）
 すみの山をーナシ（内丙） みはへしー見はへし（京・内甲）
 みはくにもーナシ（内丙）
 須弥山也ーナシ（内丙） 見侍し也ーナシ（内丙）
- 224 ないけうーないけう（内丙） 中にもー中にも（内丙） しん^信
 すーしんす（内丙） おほく侍しーおほく侍し（内甲） おほ
 く侍し 内教也 信也（内丙）
 225 訖栗^{キリ}根^{ワウ}王ー訖栗^{キリ}根^{キハウ}王（京） 訖栗^{キリ}根^キ王（内甲） 記栗^キ根^キ王（内丙）
 人迦葉^キ仏の父也ー人迦葉^キ仏の父也（内甲） 人^{父迦葉}迦葉^キ仏（内丙） 見て
 ーみて（内甲） 見（内丙）
 226 たてまつりー奉り（内丙） 給へりー一り^キ（内甲） 仏の、給
 はくー仏のの給はく（京） 仏のたまはく（内丙）
 227 尺迦ー釈迦（内丙） 也ーなり（内丙）
 228 さらにー更（内丙）
 229 ちひさきーちひさき（内丙） いつるー出る（内甲・内丙） 事
 ーこと（内丙）
 230 猶ーなを（内丙） まとー窓（内丙） さえられてーさえられて
 （内甲・内丙）
 231 これー是（内甲・内丙） 発ー沙弥（内丙）
 232 さえらる、ーさへらる、（内丙） 表すーへうす（内丙）
 233 したかへともーしたかへ共（内丙） これー是（内丙）
 234 これー是（内丙）
 235 あれともーあれ共（内甲） かれにー彼（内丙） したかひてー
 236 随て（内丙）
 237 一叔の真珠ー一叔真珠（内丙） もちてー持て（内丙） 一叔の
 238 麦ー一叔麦（内甲）
 239 粉^粉ー粉（内甲・内丙） かふーかふる（内甲） みるー見る

- 240 (京・内甲) 見ゆ(内丙)
 これ―是(内甲・内丙) 遣法の弟子―遣法弟子(内丙) 求か
 ため―求めるかため(内丙)
 241 へつらひて―へつらいて(内丙) 事―こと(内丙)
 242 第四夢云―第四には夢云(内丙) 凡木―つま木(内丙) みる
 ―見る(京) 見せ(内丙)
 243 これ―是(内丙) 正法―一法(内丙) 表す―へうす(内丙)
 244 しけく―しけて(内丙) あり―也(内丙)
 245 賊―夫(内甲) やふり―破(内丙) みる―見る(京) 見ゆ
 (内丙)
 246 これ―是(内丙) 園―国(内丙) 事―こと(内丙)
 247 諸小象―諸象(内丙) ありて―しりて(内丙)
 248 いたさしむ―出さしむる(内丙) みる―見る(京・内丙)
 249 これ―是(内丙) 遣法弟子―遣法の弟子(内甲) もろく―
 諸(内丙) あしき―悪(内丙)
 250 事―こと(内丙)
 251 きたなき―きたな(内丙)
 252 湯あむる―湯あつむる(内甲) 船―ふね(内丙)
 253 事―こと(内丙) 知て―しりて(内丙) 悉―ことく(内
 甲・内丙) みる―見る(京)
 254 これ―是(内甲・内丙)
 255 みる物―見る物(京・内甲) くるもの(内丙) みな―皆(内
 丙) とをく―遠く(内丙) さる事―去こと(内丙)
 256 一の獼猴―獼猴(内丙)
 257 もて王とす―王とす(京) もてわす(内甲) もて王とする(内
 丙) 見る―みる(内丙)
 258 これ―是(内甲・内丙)
 259 事―こと(内丙)
 260 十八人の輩―十八人輩(内丙)
 261 各―吾(京) あらそひく―あらそひひく(内甲) あらそひ
 引(内丙) 猶―なを(内丙) みる―見る(京・内丙)
 262 これ―是(内丙) 遣法弟子―遣法の弟子(内甲) 仏の正法―
 仏法の正法(内甲) 十八部と―十八部を(内甲)
 263 あり―ある(内甲)
 264 これ―是(内丙) 皆―みな(内丙) うといふ―うる(内丙)
 266 みる―見る(京) 征伐―征代(内甲)
 267 これ―是(内丙) 各門人―門人(内丙)
 268 事―こと(内丙)
 269 物―物と(京・内甲) たゞ―して―ナシ(内丙)
 270 復命―復命(同上) 変化―ナシ(内丙)
 271 くわんふみ―くはんふみ(内甲) たてゝふみ―ナシ(内丙)
 272 娑婆―娑婆外岸也(内丙) 願書―ナシ(内丙)
 273 まかりまうし―まちまうし(内甲) ナシ(内丙) そふんし給
 ―ナシ(内丙)
 274 辞―ナシ(内丙) 処分也―ナシ(内丙)
 275 ほとけの―ほとけ(内甲) 仏の(内丙) 弟子―てし(内甲)

- 276 みねをはーみねを(内甲) たとくーことく(内丙)
 きこえーきこへ(内丙) つみけるーつきける(京・内甲・内
 丙) まとひーまもひ(内甲)
 278 尺尊ー釈尊(内丙)
 280 このゝとはーナシ(内丙) さすゝみてーナシ(内丙)
 281 詞ーナシ(内丙) 香ーナシ(内丙)
 282 なかりよりーナシ(内丙) 宮をー宮(内丙)
 283 御障子ーナシ(内丙) 領したてまつる也ー奉領也(内丙)
 284 ねー音(内丙) なんーなむ(内丙)
 285 とふとりー古とふ鳥(内丙) おく山ーおく山(内甲) 心ー
 こゝろ(内甲) なんーなむ(内甲) 古今ーナシ(内丙)
 286 さらくなゝりーナシ(内丙) いとくなるーナシ(内丙) ほん
 しーほむし(内甲)
 287 遺言ーナシ(内丙) 梵字也ー梵字(内甲) ナシ(内丙)
 288 いうそくにーナシ(内丙) あまりーあまりに(内丙)
 289 優息にーナシ(内丙) 大臣ー大臣也(内丙) ヒタ、クーヒタ、ケ
 丙)
 290 けちえんにーけちえん(京) かくゝまのーナシ(内丙)
 291 掲焉にー掲焉也(内丙) 具しゝる也ーナシ(内丙)
 292 ふくちーふくち(京) ふく地(内丙) まきてーまきて 福地也
 丙)
 293 百千劫^ガー百千万劫(京・内甲・内丙)
 294 よー世(内丙) たねをまきーたつねまき^セ(京) 種をまき(内
 丙)
 295 丙) なりぬるー成ぬる(内丙)
 けうしてーナシ(内丙) わかきーわかき^舞(内甲) つかさーつ
 かき^カ(内丙) もえきかけーもえきのかけ(京・内甲) ナシ
 丙)
 296 幼驚駭^{日本記}ー驚駭^{日本記}(京) 幼驚駭^{日本記}(内甲) 驚駭^{日本記}(内
 丙) 興ーナシ(内丙) 衛府官ー衛府官也(内丙) 萌黄ーナ
 シ(内丙)
 297 いとみつ、ーナシ(内丙)
 298 挑ーナシ(内丙) 御階中階ー御階^{階本}中階(内甲) 御階中階也
 丙)
 299 さくらはーさくらを(内丙)
 300 ふくかせー吹風(内丙) さくらー桜(内丙) なんーなむ(内
 甲)
 301 たむけー手向(内丙)
 302 拾遺云ー拾遺二云(内丙)
 303 いれてー入て(内丙) よしのふー能宣(内丙)
 304 ちきりー契(内丙) こゝろは、こゝろはへ(内甲) 心は、
 丙)
 305 もちゐーもちい(内丙)
 306 梨子ー梨(内丙) 柑子ーナシ(内丙)
 307 花ーはな(内丙)
 308 よるー夜(内丙) なかめー詠(内丙) 伊勢^詠語(京)
 伊勢物語(内甲) ナシ(内丙)

- 309 おほからす—おほしからす (内丙)
 用意—用意也 (内丙)
 310 みやまき—みやま木 (内甲・内丙) さたむる—あらそふ (内丙)
 311 丙 はことりも—はこ鳥の (内丙) いろ—色 (内甲・内丙)
 312 果鳥—果鳥^{ハコトリ} (内甲) 果鳥 (内丙) 容鳥—容鳥^{カホ} (内丙) 常陸国—
 ひたちの国 (内丙) かほはな—かほ花 (内丙) いふ—云 (内丙)
 この花—此花 (内甲) 此花 (内丙) この鳥—此鳥 (内甲) 此鳥 (内丙)
 丙 あり—ありと云々 (内丙)
 313 あや—侍る—ナシ (内丙)
 314 みす—見す (京) みす—さん—ナシ (内丙) みもせぬ—見も
 せぬ (京・内甲) くらさん—くらさむ (内甲)
 316 書といふ也—書といふなり (内甲) 書也 (内丙)
 319 わかな下 若菜下—わかな下 若菜下 (京) わかな下 若菜下 (内甲) 若菜下
 (内丙)
 320 おもへと—思へと (内甲) 思へとも (内丙)
 321 あしひき—古 あし引 (内丙) 山た—山田 (内丙) そをつ—
 そほつ (内甲) そらつ (内丙) われ—我 (内丙) ほし—ほ
 (内丙) こと—こと (内丙) 古今—ナシ (内丙)
 322 なそかく—なそや (内甲) なそやかく (内丙)
 323 すくさん—すくさむ (内甲) すくらむ (内丙)
 324 こと—こと (内丙) おもはす—思はす (内丙) いひはてぬ—
 いひ出ぬ (内丙) 世中—世の中 (内甲・内丙) 古今—ナシ
 (内丙)
 325 殿上の、りゆみ—殿上ののりゆみ (内丙)
 326 三月尽に—三月尽 (内甲) 射的—はる—ナシ (内丙)
 327 たつこと—たつを (京)
 328 けふ—今日 (内甲) おもはぬ—思はぬ (内丙) 暫今—ナシ (内丙)
 329 やなきのは—やなきの葉 (内甲) うけはりて—うけはりて^諸
 (京・内甲) いとむ—いとむ (京・内甲) やな—いと—ナシ
 (内丙)
 330 むしん—むしん^{無尽} (京・内甲) こ、—こ、^{巨々} (京) いま—いとま
 (京・内甲) むむ—せめ—ナシ (内丙)
 331 たち—たち^達 (京・内甲) くだし給—くだし (内甲)
 とて—給—ナシ (内丙)
 332 養由基者—養由基者^{ヤウユキシヤ} (内甲) 善—射者—善—射者^{セムシヤ} (京) 善射^{センシヤ}
 者 (内甲) 発—発^{ハツ} (内甲) 楚有—楚有^{ハツ}而—ナシ (内丙)
 333 百—百^{ヒヤク} (内甲) 左右—左右^{サウブ} (内甲) 日—日^{イツ} (内甲) 百中^{ヒヤクチュウ}
 —本記—ナシ (内丙)
 335 論無—論無^成 無論 (内甲) 無論也 (内丙)
 336 あのこと—ナシ (内丙) ぬし—え給—ナシ (内丙)
 337 啓—啓給也 (内丙) 如案—ナシ (内丙) 怨—ナシ (内丙)
 338 世中—³⁵⁰ 説也—ナシ (内丙)
 339 かけん—かけむ (内甲)
 342 莽—莽 (内甲)
 343 将—時^時 (京) (内甲) 冠—ナシ (内甲)

- 345 後漢逢萌—後漢書萌（内甲） 東—東（内甲）
 346 懸—縣（内甲）
 351 左大将—左大将（内丙） 右大臣—右大将^臣（京） つかうまつり
 一つかふまつり（内丙） 給ける—給へる（内甲） 給ふける 髯
 黒也（内丙）
 353 め—め（内丙） た、して—た、して 目也（内丙） 御い—せ
 給—ナシ（内丙）
 354 瞞—瞞也（内丙） タ、ス—タ、ム（内甲） 徳イ—フ—ナシ（内丙）
 省ハ—省^フ（京）
 355 人の—さま—ナシ（内丙）
 陪從—陪祝（内甲） 陪從也（内丙） 人給—人給也（内丙） 出
 車之名—出車名（内丙） 御あ—ま也—ナシ（内丙） 也—なり（内
 甲）
 357 いろかはりて—色かはり（内丙）
 358 ちはやふる—^古ちはやふる（内丙） もみち—紅葉（内甲・内
 丙） しにけり—しけり（内丙）
 359 のみ—も（内丙）
 360 もみち—紅葉（内丙） ふくかせのをと—吹風の音（内丙）
 361 かくよりも—かくよりし（内甲） かくまりも（内丙） あつ—
 たる—ナシ（内丙） なれたる—なれる（内甲）
 362 楽—楽也（内丙）
 363 松に—はす—ナシ（内丙）
 364 門外見物也—ナシ（内丙）
 365 たかむら—たかむら（内丙） 朝臣の—朝臣（内甲） あそんの
 （内丙） あしたを—あした（内丙）
 366 桑田行—桑白汗^{田行}（京） 桑日行（内丙） 海—雪^海（京） 用令—冬^界
 （京） 月令（内甲） 春—^春（京） 封^封琴—ナシ（内丙）
 367 ことを—^琴（京・内甲） ナシ（内丙） とらん—と、む
 （内丙） しうる—しる（内丙） なん—なむ（内丙）
 368 はた—はた（京・内甲・内丙） そら—空（内甲） うこかし—
 うこかし（京・内甲） 時—とき（内丙）
 369 くもいかつちを—くもいかつちを（京・内甲） 雲雷をつちを
 （内丙） さはかし—^雲いかし（内甲）
 370 あかり—めかり（内甲） あか—けり—ナシ（内丙）
 372 云—日（内丙） 之—ナシ（内丙）
 373 立—^立意（内甲）
 374 皆—ナシ（内丙）
 375 治—沉（内甲） 莫—草（内甲） 真（内丙） 讞—羔論（内丙）
 莫讞於^草樂（内甲） 莫羔論於^草樂（内丙）
 377 讞古善字—羔（内丙）
 378 文選琴賦—ナシ（内丙）
 379 能^{フラス}尽^{フラス}雅琴—ナシ（内丙） 唯—唯（内丙） 兮—兮（内丙）
 381 注—註（内甲）
 382 霖—霜（内甲）
 383 翰日—^秋393 月律—ナシ（内丙）
 384 則秋霖—則。霖（京）

- 387 師襄——々々(内甲) 如—女(内甲)
 388 召—呂(内甲) 南呂—ナシ(京) 涼—ナシ(内甲) 穆—初
 同(京)
 389 召—呂(内甲) 鐘—鐘^鐘(京)
 390 立—忘^立(内甲)
 391 師曠—師曠^{シヨウ}(京)
 392 商—高(内甲) 鐘—鐘(内甲)
 393 鐘—鐘(京)
 394 喜—寿喜(内丙) 熙—悲(内甲)
 395 おにかみ—おにかみ^鬼(京) おにかみ^鬼(内甲)
 396 思—思ひ(内丙)
 397 よしなし—はしなし(内丙) を、—緒を(内丙) たちて—断
 て(内丙) 其後—その、ち(内丙)
 398 事—こと(内甲) 也—なり(内甲)
 399 思—思ひ(内丙) いて—いひ(内甲)
 400 おもふとは—おもふには(内甲) てき—てし(内丙) み、な
 くさ—みかなくさ(内甲) てたはふれ—て。はふれ(京)
 401 つまに—つま(内甲)
 402 あさちふ^の。—あさちふの(京・内甲・内丙) かはら—か原
 (内丙) よ—世(内丙) 思—思ひ(内丙)
 403 なかめて—なかめつ、(京)
 404 よ—世(内甲・内丙)
 406 を、も—をも(内丙)
- 407 しか—し(内丙) つたはる—いたはる(内甲)
 409 そら—空(内丙) かりかね—かり金(内丙)
 410 給らん—給はん(内丙)
 411 しら雲—しらくも(京) 白雲(内丙) かり—鴈(内丙) かす
 一數(内丙) みゆる—見ゆる(京・内丙) 夜—よ(京)
 412 かせ—風(内丙)
 413 さむく—寒く(内丙) 風—かせ(京) ふきまさる—吹まさり
 (内丙) 思—思ふ(内丙)
 415 想夫恋^{平調}—想夫恋^{平調}(内甲・内丙)
 416 みる—見る(京・内丙)
 417 ゆく—行(内丙) おもふぞ—思ふ(内丙)
 418 せん—せむ(内丙) なん—なむ(内丙)
 419 いと—糸(内丙) なに—何(内丙) たまのを—玉のを(内
 甲) 玉の緒(内丙)
 420 ひとりうち—ひとりこち(京) うたひて—ナシ(内丙)
 421 山あら、きて—やまあら、きて(内甲) 山のあときて(内丙)
 422 まさるかにやとくまさるかにや—まさるからやとくまさるかや
 (内甲) 催馬楽^{催馬楽}—催馬楽(内甲)
 423 よ—夜(内丙) みる—見る(京) 物—もの(内甲)
 424 思よ^夜—思よ(京) 思ふよ(内甲) おもふ(内丙)
 425 ふえたけ—ふえ竹(内丙) ふき—吹(内丙) かせ—風(内
 甲・内丙) こと—こと(内丙) すゑのよ—末の世(内丙)
 427 おひ—おい(内甲・内丙) しるへき—しるき(京・内甲・内

- 442 丙) ふえたけ—ふえ竹 (内甲) 笛竹 (内丙) ものとは—もの
 441 438 かは (内甲) 物とは (内丙)
 437 435 すいしんに—すいしんよ (内甲) すいしんに (内丙) りやう
 433 432 せん—りやうせつ (内甲)
 431 430 □□ひ給よ—らそひ給よ (京) らそひ給 (内甲) らそひ給よ
 429 近衛 隨身 領 (内丙)
 428 匂兵部卿の宮—薰大将またわか君にをわせしと匂兵部卿宮も
 (内丙) また、時—三宮とていとけなくおはしまし、か (内
 丙) 申、—申 (内甲) あに—あそひ (内甲)
 430 御あゝ式部—ナシ (内丙)
 431 卿のゝ所を—ナシ (内丙) 二宮—二の宮 (京) 夕霧の—夕霧
 (内丙)
 432 とをり—とほり (内甲) とおり (内丙) たかひに—ナシ (内
 丙)
 433 氏の—氏 (内丙) 御らん—御覧 (京・内丙) 仰られ—おほせ
 432 431 られ (内丙) 也—いふなり (内丙)
 430 いてくる—いてつる (内丙)
 429 かの—う也—ナシ (内丙) なん—なむ (内甲) とり—とか
 (京・内甲) いう—いふ (内甲)
 428 孫真々須説—ナシ (内丙) 云—之 (内甲)
 427 426 す、むし 鈴虫 横笛並 —す、むし 鈴虫 横笛並 鈴虫 (内
 丙)
 425 ころ。すちす—ころはちす (京) 衣はちす (内甲) こんはちす
 (内丙)
- 455 □□—かの (京・内甲・内丙)
 452 451 人—人々 (内甲) まい—ひ給—ナシ (内丙)
 450 頂戴—頂戴 (内甲)
 449 けかけたるかね—けかけこかね (内甲) 仏—ほとけ (内丙)
 448 447 をなし—おなし (内甲・内丙)
 446 念誦—御念誦 (内甲・内丙) 具—具共 (内丙)
 445 百歩—ひやくふ (内丙) ほ、—けて—ナシ (内丙)
 444 百歩—唐百歩 (内丙) 密と—蜜と (京) 蜜をと (内甲・内丙)
 443 442 て合—ナシ (内丙)
 441 440 けかけたるかね—けかけこかね (内甲) 仏—ほとけ (内丙)
 439 438 香—行香人 (内丙)
 437 436 堂 饒—堂饒 或云 けかけたるかね (内甲) 堂饒終 (内丙) 行
 435 434 □□—かの (京・内甲・内丙)
 433 432 香—行香人 (内丙)
 431 430 堂 饒—堂饒 或云 けかけたるかね (内甲) 堂饒終 (内丙) 行
 429 428 □□—かの (京・内甲・内丙)
 427 426 香—行香人 (内丙)
 425 424 堂 饒—堂饒 或云 けかけたるかね (内甲) 堂饒終 (内丙) 行
 423 422 □□—かの (京・内甲・内丙)
 421 420 香—行香人 (内丙)
 419 418 堂 饒—堂饒 或云 けかけたるかね (内甲) 堂饒終 (内丙) 行
 417 416 □□—かの (京・内甲・内丙)
 415 414 香—行香人 (内丙)
 413 412 堂 饒—堂饒 或云 けかけたるかね (内甲) 堂饒終 (内丙) 行
 411 410 □□—かの (京・内甲・内丙)
 409 408 香—行香人 (内丙)
 407 406 堂 饒—堂饒 或云 けかけたるかね (内甲) 堂饒終 (内丙) 行
 405 404 □□—かの (京・内甲・内丙)
 403 402 香—行香人 (内丙)
 401 400 堂 饒—堂饒 或云 けかけたるかね (内甲) 堂饒終 (内丙) 行